

## パレスチナの現状からみた 幸せのカタチ

～第3回武蔵野大学  
しあわせフォーラムご報告

主任 渡部 博志



(写真) 講演される清田氏

しあわせ研究所では、国際シンポジウムの他に、2017年から「しあわせフォーラム」を開催しています。これまでに2回開かれています。2018年6月5日に第3回となるしあわせフォーラムが有明キャンパスで開催されましたので、簡単ではありますがみなさまにご報告いたします。

今回は「パレスチナの現状からみた幸せのカタチ」と題して、国際連合パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA；United Nations Relief and Works Agency）の保健局長の清田明宏氏<sup>せいたあきひろ</sup>にご講演をいただきました。ちなみに清田氏はしあわせ研究所長である西本学長と同じ中学・高校の2年先輩で、約40年ぶりの再会とのことでした。

世界には約2,650万人の難民がおり、そのうちパレスチナ難民は500万人。中東戦争によって生まれた難民は、避難先に定着する形になり、3世代にわたる家族もあるのが現状です。難民キャンプというイメージでテントが並んでいる画を思い浮かべる方も多いかもしれませんが、パレスチナの実情は異なります。元々の難民が定住する形になった結果、見た目だけでは難民キャ

ンプであることが分からないような街になっているとのことです。

しかし、紛争は終わっていません。つい先日（2018年5月14日）もガザ地区で58名の死者を出す衝突が起きましたが、現在10歳以上のパレスチナ難民は3回以上の戦争を経験しています。講演の中で、戦車によって壁が壊された家に住む3世代家族の写真がスクリーンに映されました。100名を超える参加者は、一同に世界の現実を突きつけられた瞬間でした。

UNRWAはパレスチナ難民の保健サービスを担う組織ですが、パレスチナ難民の死因の第1位は生活習慣病で、8割近くに上るとのことです。この背景には難民であるが故に貧しく、失業率が4割にも上り、食生活が偏ることがあるためです。難民に対する補助があり、100円で3～4キロものパンが食べられることも、結果として食生活が偏ることにつながっています。

パレスチナ難民の健康サービス・システムの全体を統括する立場にある清田氏は、パレスチナ難民の健康問題はパレスチナの政治問題であるということ、したがってSDG 3（すべての人に健康と福祉を）はSDG 16（平和と公正をすべての人に）がなければ実現できないというお話がありました。

世界の幸せをカタチにするためにも実情を知る、非常に有意義な90分間でした。